

# 平成28年度文学研究科博士論文要旨

## 寂円禅師研究

文学研究科宗教学仏教学専攻 伊藤 秀真

福井県大野市に位置する宝慶寺は、寂円禅師によって開かれた寺院である。寂円禅師の法を嗣いだ義雲禅師は、宝慶寺二世・永平寺五世中興である。義雲禅師以降の永平寺住持職は、義雲一曇希一以一と次第し、三十八世緑巖巖柳に至るまで、寂円禅師を派祖とする寂円派によって独占されている。つまり永平寺は、寂円派によって長く護持されていた寺院ということになる。寂円派が永平寺に与えた影響について考察することは、曹洞宗僧団が形成されていく過程を捉える上で、検討しなくてはならないテーマと言えるであろう。

ところで現在、宝慶寺を開いた寂円禅師のことが記載されている史料は、あまり遺っていない。それは、寂円禅師が禅を修行の中心としていたため、言葉や文字で教えを遺さなかったからであるといわれている。宝慶寺は天正の兵乱に遭い、この時に多くの文書等が焼失したことも、その要因として考えられることであろう（ただし兵乱により灰燼に帰した事実については不明で、天正大地震によって被災したことが関係しているとも考えられる）。このようなことから、寂円禅師は、後世、没跡の人物とも称されている。

本論文は、寂円派の派祖である寂円禅師が、如何なる人物であるのかを究明することを目的としている。本論文は序論・本論・結論の三つによって構成され、序論の前には凡例を、結論の後には資料を付けてまとめたものである。以下では、本論（全四章）において究明した事柄を中心に、概略を述べることにする。

第一章では、寂円禅師と義雲禅師に関する伝記史料について論じた。

はじめに、寂円禅師の伝記史料の所在を明らかにした。先述したように、寂円禅師に関する史料は少ない。義雲禅師の史料にも寂円禅師のことが記載されているので、義雲禅師の史料についても併せて取り上げた。

宝慶寺には『宝慶由緒記』が所蔵されている。これは、宝慶寺十四世建綱が著したとされる、宝慶寺の開創について纏められた史料である。建綱は十五世紀の人物である。

宝慶寺所蔵「永平寺後住相統<sub>二</sub>付願書」と『宝慶由緒記』に記述されている「銀椀峯」の地名（山名）は、近世以前には用いられていない可能性がある。それならば、『宝慶由緒記』は十五世紀に成立したとは断定することができない。『永福面山和尚広録』と「永平寺後住相統<sub>二</sub>付願書」、『宝慶由緒記』の三史料には共通している字句が多いことや、牛と犬の伝承についての記述があること等、共通した内容が含まれていることが認められる。それらの点から『宝慶由緒記』は、江戸時代以降の史料である『永福面山和尚広録』と「永平寺後住相統<sub>二</sub>付願書」を基にして成立したことが推察される。

ところで、寂円禅師と義雲禅師の伝記史料は、『義雲和尚語録』の上巻に収録されている上堂語等を引用して成立していることを指摘した。これは、両師に関する記録が少ないことから、伝記内容を膨らませた可能性がある。義雲禅師の語録からの引用については『延宝伝燈録』を除き、義雲禅師の行状と上堂を行った場所とが対応していた。更に『日本洞上聯燈録』の義雲禅師章は、宝慶寺三十世龍堂即門が著した『義雲和尚略伝』を踏襲して纏められたことについて、両史料を対校して証明した。

第二章では、寂円禅師の行状と寂円禅師の人物に関する伝承を論じた。

寂円禅師の伝記史料に記録されている寂円禅師の行状について概略をまとめると、出生して来朝するまでの宋国での動向のこと、来朝した後、懐奘禅師に嗣法するまでのこと、宝慶寺の創建について、そして示寂に至るまでという主に四つの事柄が中心である。この章では、次章で展開する宝慶寺の創建のこと以外の三点について論じた。

寂円禅師の出生と示寂については、江戸時代以降の記録が遺っているだけである。つまり、寂円禅師が宋国人であると伝えられていることや、出生・示寂に関することは、江戸時代以前に遡る史料がないことから、寂円禅師が宋国人であると断定できないのであり、日本人である可能性をはらんでいる。

寂円禅師の嗣法については、寂円派の三物や伝記史料

によって、その多くには寂円禪師が懷奘禪師の法嗣であると記載されている。伝記によれば、寂円禪師は承陽庵の塔主に就いていたとされるが、その時期は懷奘禪師滅後のことであろう。このことは、寂円禪師が宝慶寺に住している時に、瑩山禪師が宝慶寺で寂円禪師のことを塔主と称していることから解せられることである。寂円禪師は、師である懷奘禪師がかつて永平寺において師道元禪師の塔主であったことから、この役職を宝慶寺に住持している時に継承したと推察される。

次に、寂円禪師には語録が遺っていない。故に、寂円禪師の嫡嗣義雲禪師の語録・伝記史料から、その人物像を考察した。

語録の中の寂円禪師に対する賛には、寂円禪師が到達した禅の境地とその教えが義雲禪師に伝わったことが記述されている。一方、伝記史料には、寂円禪師の下に参じた者は多かったが、寂円禪師はただ独坐するのみであったことから、その機に契う者が少なかったことを伝えている。このように、義雲禪師の語録と伝記史料には、寂円禪師が坐禅に徹した人物であることが記録されている。

ところで、寂円禪師に関する二つの伝承が江戸時代以降に伝えられている。一つは、寂円禪師が永平寺の閏位の三世とされていたことである。玄透即中の「世代改」によって、寂円禪師は三世から外れることになったことについて論じた。もう一つは、「如浄禪師頂相」の賛の智琛という名が、寂円禪師のこととされたことである。寂円禪師が宋国人であると断定できないことや、寂円禪師には智琛という名があったことを立証する史料が遺っていないことから、智琛は別の人物ではないかと考察した。

第三章では、宝慶寺に所蔵されている「知円沙弥等寄進状」と「円聡沙弥寄進状」をもとに、宝慶寺が開創された経緯について論じた。

はじめに、宝慶寺に所蔵されている二つの「寄進状」の中に記載されている人物が、如何なる人物であるかを検討した。「円聡沙弥寄進状」の中には、十人の法名が含まれている箇所がある。この部分を通して、知円が宝慶寺を開闢した人物であることや、宝慶寺は伊自良氏と同氏に係る氏族によって支えられていたことについて考察した。

また、義雲禪師の法嗣である曇希禪師が晩年に行った開版事業を通して、永平寺・宝慶寺に入院した人物が、伊自良氏の出身者である可能性についても言及した。「円聡沙弥寄進状」には、寂円派の嗣承についての記述がある。これは、伊自良氏が宝慶寺の寺院運営にまで干渉し

たこととみるよりも、宝慶寺に住している者が伊自良氏の人物であるから、嗣承のことが「寄進状」に記されたのではないかと考えられる。そして、一族の菩提を祀るために宝慶寺を創建した伊自良氏の知円は、寂円禪師と同一人物であると比定した。

次に、伊自良氏が寄進を行った敷地のことを中心に考察した。伊自良氏が宝慶寺に寄進を行った敷地は、伊自良氏の知行地であることを明らかにし、更に「知円沙弥等寄進状」の四至の範囲内に、現在の宝慶寺の伽藍が建立されていることを証明した。

『洞谷記』に依れば、瑩山禪師が弘安五年(1282)に宝慶寺を訪ねている。つまり、この時には宝慶寺の伽藍が造営されていたことになる。「知円沙弥等寄進状」が成立した正安元年(1299)における知円等の寄進は、伽藍が建立された後のことになる。宝慶寺が創建された時には、宝慶寺の境内地が伊自良氏の所領であったのであり、その後、知円等が行った寄進によって、境内地は宝慶寺領となったといえる。

第四章では、寂円禪師が宝慶寺以外に開いたとする伝承がある、妙法寺・真善庵・白蔵庵の三箇寺について論じた。

寂円禪師には、福井県下に妙法寺を開いたという記録がある。妙法寺については、これまでに越前市妙法寺町に存在していたとする説がある。しかし筆者は、白山信仰に関する勝山市遅羽町比島にこの寺が創建されたと論考した。それは、宝慶寺に白山信仰に関する「比丘尼明輪売券」が所蔵されていることや、宝慶寺の南方にある白山神社の傍らには白蔵庵が建立されていたと伝えられていることなど、寂円禪師と白山信仰が無関係とは言いがたいからである。平泉寺白山神社には、天文六年(1537)にまとめられた『靈王山平泉寺大縁起』が所蔵されている。この中には、平泉寺四至についての記述があり、乾の方角には比島観音が位置する。比島観音の周辺には、仏教に通じる“妙法”を冠した地名が残っていることから、比島には白山信仰に関連する妙法寺が存在していた可能性がある。ただし四至について、『靈王山平泉寺大縁起』以外には室町時代以前に遡る典拠がなく、寂円禪師在世時にこの四至が成立していたのかは解明すべき点である。

次に、寂円禪師が土橋という場所に、真善庵を開いたと伝えられていることについて取り上げた。寂円禪師の伝記には、真善庵のことが記載されていない。しかし後世、真善庵は宝慶寺末寺の曹源寺の前身の寺院であったとされるようになる。この説を検証して、寂円禪師が真善庵を開創した可能性を探ることにした。曹源寺は、は

じめに岫慶寺の近辺で創建された。この場所は、土橋であったことが認められる。しかし、ここに真善庵と号していた寺院が存在していたことについては、現在のところ不明である。また、現在の曹源寺の所在地にかつて寺院が存在していたのであれば、その寺院についても曹源寺の前身の寺院とみることができる。曹源寺が移転する前に、かつて、どのような寺院が建立していたのか不明であるが、曹源寺の近辺には徳正寺が建立されていたという記録が遺っている。徳正寺が土橋にあったとは断定できず、またこの地が仮に土橋であったとしても、ここに真善庵が存在したという記録も見出すことはできない。

第三に白蔵庵は、寂円禪師が弘長四年（1264）に白山

神社の別当として、万霊塔の南の地に建立された寺院であったと伝えられている。しかし、寂円禪師が白蔵庵の開山であることを立証する史料は遺っていない。故にここでは、江戸時代に大野市佐開地区へと移転をした、白蔵庵の現状について取り上げることにした。白蔵庵は文政三年（1820）九月に、佐開で再興されたという記録がある。現在、佐開には「釈迦堂」と号する一字があるだけで、釈迦堂の周辺には、伽藍があったと推測できる礎石が残っている。佐開で再興した白蔵庵は、昭和前期に泰嶽伯道師が住した後、現在に至るまで無住となっているため、詳細は不明のままである。

以上、寂円禪師の伝記と伝承を中心に研究と調査を行い、本論（全四章）に成果をまとめた。

# 天台智顛における三諦三觀思想の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻 TRAN QUOC PHUONG

本論文は、天台智顛（538-597）における三諦三觀思想の研究をしたものである。

序論において、近代の日本での天台教学と智顛の三諦三觀思想に関する学術的研究の歴史を概論し、さらにベトナムでの仏教全般の学術的研究及び天台教学研究の状況を概括し、本研究の目的と方法論、研究の構成と意図、及び本研究の位置を明示した。日本では智顛の三諦三觀思想について部分的研究は多いが、智顛の全著作を通じて三諦三觀思想全体の教学体系を研究する論文は限られている。ベトナムでは越訳大藏経は未完成であり、仏教全般の学術的研究及び天台教学の研究は未だ進展していない。三諦三觀思想の研究に対するこのような現状において、本論文の研究は、日越両学会において意義と価値があると考えられる。

本論の第一篇は「大乘仏教における二諦思想の形成と展開」と題し、インドの龍樹から中国隋代の智顛に至るまでの真俗二諦説のあゆみを究明した。

第一章では龍樹の二諦説を究明し、『中論』『大智度論』を取り挙げ、両論に説かれる二諦の意義を明らかにした。龍樹が提起した二諦説は真理に関する学説（理教）と教法に関する学説（約教）の両側面を意味し、『中論』は消極的側面を、『大智度論』は積極的側面を表わしている。龍樹は諸法皆空・諸法実相を宣揚するに他ならない。

第二章の「中国における二諦思想の受容と変遷」では、二諦思想の受容初期から天台智顛が三諦説を提起するに至るまでを魏晋時代の受容期・南北朝時代の変遷期・隋代の発展期に分け、各時代の人物・学説・特徴を究明した。魏晋時代の受容期は、道安、鳩摩羅什、僧肇を取り挙げ、三者の二諦説の見解や特徴を究明した。この時代は格義仏教という特徴があり、三者のうち、道安は未だ格義仏教の傾向を離脱していない。鳩摩羅什は単独の著書が存在せず、その主張は不明であるが、訳経事業によれば鳩摩羅什は真俗二諦に関する術語を的確に把握し、二諦思想に精通していたと推測できる。僧肇は「有、無」を俗諦とし、「非有非無なる不真空」を第一真諦と主張している。僧肇は龍樹系般若教学の空思想を忠実に反映し理解できた。南北朝の変遷期は昭明太子を中心とする二十三家と成実学派の三大法師を取り挙げ、各自の見解や特徴を明らかにした。昭明太子等は質疑応答の形式で

真俗二諦をめぐる議論を行ない、世人の所知を俗諦とし、出世人の所知を第一義諦と主張した。特に昭明太子は即有即無を俗諦とし、離有離無を真諦と主張し、真俗二諦に優劣をつけ差別的に捉えた。成実論師達は三仮を俗諦とし四忘を真諦と主張した。莊嚴寺僧旻は俗即真・真即俗と主張し、二諦不異相即説を成立させた。開善寺智蔵は俗即真・真即俗に基づき、二諦を中道と統一すると主張し、二諦即中道説を成立させた。両者は一体説に帰属する。龍光寺僧綽は空と色の真俗二諦は互いに離れることなく、空即ち色なり、色即ち空なるとして、二諦不離相即説を成立させた。この説は異体説に帰属する。成実論師の二諦説の特徴は俗諦としての三仮を提起したものである。隋代の発展期は嘉祥吉蔵と天台智顛を取り挙げ、両者の見解や特徴を明確にし、特に両者が異なる方向性に基づき、真俗二諦説を展開したことを究明した。吉蔵は龍樹系般若教学の思想を土台として四重二諦説を成立させ、智顛は『法華経』の立場から蔵通別円の化法四教によって七種二諦説を成立させた。吉蔵の四重二諦説のなかで、最高の二諦説は、有・空・非有非空・非二非不二を俗諦とし、不三、言亡應絶を真諦と主張した。智顛の七種二諦のなかで、最高の二諦説は円教の二諦とし、幻有・幻有即空を俗諦とし、一切法有に趣き空に趣き不有不空に趣くのを真諦と主張する。智顛は真即是俗、俗即是真とする円教の二諦を不思議の二諦と称し、真諦と俗諦とが相互に融合しあい一体となり、不二であり、その体こそが中道であるとしている。智顛は、真俗二諦は決して二のみならず、第三諦の中道も存在することを認知し、後に円教の即空即仮即中の三諦説を提唱したと考えられる。

本論の第二篇は「天台智顛における三諦三觀思想の所依経論」と題し、智顛の三諦三觀思想の典拠を究明した。

第一章の『中論』の二諦説から『仁王般若経』『菩薩瓔珞本業経』の三諦説では、その三経論を取り挙げ、それぞれ所説の二諦や三諦を考察した。『中論』自体は三諦を説かず、二諦説を説示している。観四諦品第18「因縁所生法」の偈に関して、智顛は『法華経』の立場から蔵通別円による円融三諦説を成立させた後、円教の立場に立脚し、「因縁所生法」の偈を「因縁所生法、即空即仮即中」と読み換えたと考える。『仁王般若経』所説の

三観は法仮観・受仮観・名仮観の三観であり、智顛が説く三観とは全く関係がない。『仁王般若經』所説の三諦は空諦・色諦・心諦及び世諦三昧・真諦三昧・中道第一義諦三昧である。この三諦説は智顛の藏通別円による三諦説とは異なり、智顛が説く円融三諦の境地には到達していない。『菩薩瓔珞本業經』所説の三諦は有諦・無諦・中道第一義諦である。『菩薩瓔珞本業經』所説の三観は従仮入空観・従空入仮観・中道第一義諦観であり、智顛はこの三観説を根拠とし、三観教義の一部分として構成した。

第二章の『法華經』における三諦三観の所依』では、寿量品を手掛りに方便品を考察した。智顛の円融三諦は『法華經』を土台とし、三諦の由来は寿量品を根拠とし、円融三諦は方便品を根拠として円融三諦と解釈したと考える。『法華經』の立場からは円教・円妙・円満・円足・円頓による円融三諦を成立させた。『法華經』を離れば円融三諦は成り立たない。

本論の第三篇は「天台智顛における三諦三観思想の展開」と題し、智顛の生涯にわたる著作を枢要として三諦三観思想の独自性と優越性を徹底的に究明した。

第一章の「天台智顛の前期時代著書の考察」では、『次第禪門』『法華三昧懺儀』『六妙法門』『覺意三昧』『方等三昧行法』『法界次第初門』『天台小止観』の七著作を取り挙げて考察し、各書に表わされる三諦三観を究明した。『次第禪門』『六妙法門』『天台小止観』は禪經經典として重要な位置を占め、空仮中の三観を説示するが、次第隔歴の三観にとどまる。空仮中の三諦思想は未だ教学体系を構成していないが、三観を説示する際に、三諦にも関心を寄せて、後期の三諦思想体系を大成する萌芽が見られる。『法華三昧懺儀』『覺意三昧』『方等三昧行法』は実践法の意義をもち、『法界次第初門』は天台用語を取録したものであるが、いずれも思想的教学体系を構成するものではない。

第二章の「天台智顛の後期時代著書の考察」では、『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』の法華三大部を取り挙げ、各書に表わされる三諦三観の独自性と優越性を詳細に論述し、智顛の円熟した三諦三観の教学体系の構成内容とその特徴を究明した。

『法華文句』は智顛の法華解釈論である。本書は聴記本・整理本・丹丘添削本・天宝再治本の四段階の体裁を経て、陳の禎明元年（587）から唐の天宝七年（748）に至るまでに完備された。平井俊栄氏は、『法華文句』は吉蔵の『法華玄論』『法華義疏』を下敷きにして執筆されたと指摘しているが、本研究において、現行の『法華文句』に説示される教学思想・智顛の分科解釈・四種解

釈論・三諦三観思想を究明するとともに、吉蔵の『法華玄論』『法華義疏』の内容とを比較対照し、両者の方向性と教説内容とは全く異なることを明確にした。『法華文句』に表出する分科解釈法及び四種解釈論は天台智顛が独自に創作したものである。『法華文句』所説の三諦は真俗中・空仮中の型を展開し、両型は同じである。有無中の三諦型の表出箇所は少なく、使用頻度も低い。藏通別円による三諦のなかで、藏通の二教では中道を論じていないので、真俗二諦に止まり、三諦は成り立たない。別教では次第隔歴の三諦説を構成している。円教では円融相即一体の三諦説を構成している。円融相即一体の三諦は智顛が説く三諦教学体系であり、この円融三諦が諸法実相・真如法界・実性實際であり、これこそが世間相常住であることを明確にした。『法華文句』所説の三観は四種解釈論の観心釈によって成り立つ。智顛は『法華經』所説の一言一句を解釈する際には、その一言一句を觀照の境（所観）として自己の心において空仮中であり、即空即仮即中であると觀照している。これが『法華文句』の三観の特徴である。『法華文句』は天台法華学の入門書として取り扱うべきであると考えられる。

『法華玄義』は智顛の法華教理論である。本書は聴記本・整理本・修治本の三段階の体裁を経緯し、開皇13年（593）から仁寿二年（602）の間に、灌頂自身が修治作業を行ない校勘し成立した。智顛は開皇13年の夏安居に玉泉寺にて『法華玄義』の講説を行なったと考える。『法華玄義』所説の三観は空観・仮観・中観であり、『摩訶止観』所説の三観と同じである。別教の次第隔歴の三観と円教の不次第・円頓・円融・一心三観とがあり、円教の一心三観が、智顛が説く真意である。『法華玄義』所説の三諦は真俗中・空仮中の型があり、両者は同じである。智顛は別教の次第隔歴の三諦を龜法とし、円教の円融三諦を妙法と判定する。妙法三諦が、智顛の優越性かつ独自性を示す教理解釈論である。妙法三諦が、即一実諦であり、一実相印・一仏乘・常樂我淨・諸法実相・世間相常住である。天台法華学を究明する際には『法華玄義』を必読するべきである。

『摩訶止観』は智顛の法華実践論である。本書は聴記本・整理本・修治本・再治本の四段階の体裁を経て、大隋開皇14年（594）4月から貞観6年（632）の間に成立し完備された。『摩訶止観』全十巻のなかで正修止観章は骨格であり、内容的には十境十乘觀法である。十境のなかで、第一の觀陰入境界が骨格であり、内容的には十乘觀法である。十乘觀法とは觀不可思議境・起慈悲心・巧安止観・破法遍・識通塞・修道品・対治助開・知次位・能安忍・無法愛である。十乘觀法のなかで、第一

の観不思議境を学界では重視しているが、本論文では破法遍が十乘観法の核心であると考えた。『摩訶止観』所説の三止とは体真止・方便隨縁止・息無辺分別止であり、三観とは従仮入空観・従空入仮観・中道第一義諦観である。三観は別教の次第隔歴と円教の円融円頓三観とがある。別教の三観は次第の義・次第の修・次第の煩惱断滅・次第の証とする観法である。円教の空仮中の一心三観・即空即仮即中の義・修・煩惱断滅・証は、豎の空仮中の破法遍・横の空仮中の破法遍・横豎不二の空仮中の破法遍から成る。この三段のなかで、一段でも欠如すれば円融・円満・円頓・円足の妙の三観とはならない。空観とは豎の一空一切空と観照し、横の空即仮即中と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足

することが、智顛が説く空観の真実義である。仮観とは豎の一仮一切仮と観照し、横の仮即空即中と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足することが、智顛が説く仮観の真実義である。中観とは豎の一切中と観照し、横の中即空即仮と観照し、横豎不二の一心三観と観照する。この三義を具足することが、智顛が説く中観の真実義である。このように空仮中の三観は妙空妙仮妙中の三観であると称する。智顛は三観を実修する最高の目的は開示悟入の仏知見を顕現するためである。仏釈尊が教説した五時説からいえば法華時に至っていないと、妙空妙仮妙中とする妙観の境地に到達できないとしている。

# 大日本生産党の研究

## ——近代日本の「右翼」運動と政治——

文学研究科歴史学専攻 岡 佑 哉

### 1) 本論文の特色

本学位論文は、黒龍会（1901年結成）の主幹として知られる「右翼」（以下、「」略）運動家・内田良平（1874～1937）を総裁とする「大日本生産党」（以下、生産党）の活動を通して、近代日本における右翼運動の形成・展開を政治上に位置づけたものである。

本論文の検討対象である生産党という団体は、昭和初期の右翼による「国家改造」運動の一翼を担い、大政翼賛会成立（1940年）後、さらにアジア・太平洋戦争期も名称を変えながら、敗戦時のGHQの指令（1946年）で解散するまで活動を継続しており、当時離合集散の激しい右翼団体にあつて、政党として結成され、戦時中においても翼賛体制に収斂されなかった注目すべき存在である。また、玄洋社・黒龍会を源流に持つ近代日本における代表的な右翼団体の一つであるにも関わらず、これまで総裁内田の死去（1937年）後の戦時期も含めた体系的な分析が行われておらず、本論文はこれを正面から検討したものである。

本論文の研究史的意義を述べれば、まず、これまでの近代日本における右翼運動研究は、北一輝や大川周明など有名な思想家・運動家個別の研究に偏る傾向があり、優れた成果は積み上げられているものの、それらを含む右翼運動全体の歴史的把握は、特に当時多数存在した団体レベルの把握が不十分なため、まだ全体像が見渡せない段階にある。それは、右翼諸団体が概して離合集散が激しく、短期で姿を消してはまた結成されるというように、長いスパンでの分析が行いにくいことによるものであるが、本論文はその課題を克服することを目指した。

また、本論文は政治上の研究潮流の課題、つまり日本近現代史における、戦時期日本がファシズム化したとする議論（ファシズム論）や、大正～昭和期の政治史は現状打破をめざす「革新派」の軍人・官僚・政治家に牽引されたとする議論（革新派論）にも一つの答えを提示する研究となっている。以前は、昭和期においてテロ事件を起こし、または大衆運動を展開して政治上にインパクトを与えた右翼運動の実態面に踏み込んだ研究は不十分であったが、2000年代になると、従来注目されてこなかった「国体」論・「皇国史観」といった思想や天

皇機関説排撃でしられる原理日本社といった運動体に着目した研究も増えつつある。これらは、ファシズム論か革新派論かという二項対立ではなく、当時の思想の実態や社会構造全体の中でこれらを把握していこうという試みであり、本論文もその研究テーマを着実に受け止め、より深化させることを企図した研究である。

### 2) 本論文の構成と各章の概要

本論文の構成は以下のとおりである。

- 序章 「右翼」研究の現状・課題と大日本生産党
  - 第一章 「大正デモクラシー」状況における内田良平・黒龍会の変容
  - 第二章 内田良平「純正普選」運動と大日本生産党の結成
  - 第三章 大日本生産党の組織・政策・『改造戦線』
  - 第四章 大日本生産党結成初期の大衆運動
  - 第五章 影山正治と神兵隊事件
  - 第六章 「時局協議会」・日中戦争にみる「右翼」運動の分裂
  - 第七章 近衛新体制と「親念右翼」
  - 第八章 アジア・太平洋戦争の開戦と「親念右翼」
  - 第九章 日本の敗戦と大日本生産党系（大日本一国会・大東塾）
  - 終章 大日本生産党の歴史的位置と今後の課題
- 関連年表・参考文献・初出一覧

序章では、分析概念としての右翼の定義や研究史の問題点を指摘し、生産党を検討する意義を明らかにした。第一章では、大正期の内田について、先行研究で強調されたデモクラシーへの反発のみではなく、当該期の影響を明らかにし、第二章では、「純正普選」運動（家長選挙制）が単なる反対ではなく対案であったという意義及び、その敗北による内田の危機意識が生産党結成に繋がったことを明らかにするとともに、第三章では、先行研究では十分に取り上げていなかった内田以外の幹部や組織形成過程、機関紙の分析などを行った。

第四章では、政党として遊説・選挙出馬・他団体との共闘を模索した諸活動を明らかにし、第五章では、一学生の青年影山正治が入党し大衆運動を模索しつつもテロ事件に感化されクーデター未遂に連座する過程と、幹部

もそれを擁護していたことが党の瓦解を防いでいたことを明らかにした。

第六章では、二・二六事件後の右翼大同団結（時局協議会）の挫折と日中戦争期の反ソか反英かという対外論の分化が右翼運動分裂の契機であったことを明らかにし、続く第七章では、生産党の大政翼賛会批判・攻撃から、翼賛体制に批判的な右翼（「観念右翼」）の論理と活動の実態を、第八章では、日米開戦への慎重論や翼賛選挙の黙殺、翼賛政治会への不参加など、戦争への「消極

的」な側面を明らかにした。

第九章では、戦局悪化以降の運動（英霊公葬問題、大東塾徴用拒否事件など）や敗戦時の大東塾十四烈士自刃事件といった敗戦への反応を明らかにし、終章において本論文の意義を総括し、大衆運動志向とテロ擁護姿勢や戦時期における反政府的な在野の活動への固執といった特徴を指摘し、近代日本の右翼運動の形成・展開の一典型であったと結論づけ、戦後史への接合など今後の展望も指摘した。



# E・M・フォースターのフィクション研究

—関係性の中の「個人」たち—

文学研究科英語圏文化専攻 安藤 洋平

本論文では、「個人的人間関係」と「私生活」を重視したE・M・フォースター (Edward Morgan Forster, 1879–1970) の物語世界において、個々の登場人物がいかにして規範的価値観に異議申し立てをして抗い、好ましい自己像を確立したり、もしくは望ましくない価値観に折り合いをつけたりするのかを、テキストを綿密に分析しながら検証していく。さまざまな関係性、社会的なつながりから個人的なつながりまでの中で、「個人」がどのようにして自己像を確立したり、ときにはそれに挫折したりするのを見てみたい。個々の関係性が提示する問題、すなわち、フォースターのフィクションが提示する問題の考察により、結果として、フォースターのフィクションが提示する「個人的人間関係」とは総じてどのようなものであるのかが見えてくるだろう。

本論は批評的視点としてジェンダー(とりわけ男性性)を多く取り上げているが、その理由は、①フォースター研究におけるジェンダー批評および男性性研究が比較的少ないこと、②現実社会においても物語世界においても、性(ジェンダーとセクシュアリティ)の問題それ自体が、ジェンダー化された主体を前提とする社会の中で「個人」がアイデンティティを形成して社会生活を送るうえで重要なものであるということ、さらには、③フォースターの時代にはフィクションの検閲や同性愛の違法化によって性の問題が文学表現に切っても切り離せないものであったという事実を含む時代的・文化的・社会的背景からでもある。また、④フォースター自身の同性愛指向ゆえに、ジェンダー規範との相克が逆にプロットの展開におけるダイナミズムとなっていることが多々あり、ジェンダーについて考察することなくしては、個々の関係性や各作品をより深く探ることが不可能であると思われるからである。

本論は二部構成となっており、六章から成る第1部では短編小説を、四章から成る第2部では長編小説を主に取り上げている。

批評史上軽視されがちな短編を分析対象とする第1部では、ジェンダーおよびセクシュアリティを中心的視点とする。少数の人物や事象のみに語りの焦点化がなされる短編の特質ゆえに、特定の「個人」のジェンダーおよ

びセクシュアリティ(観)の綿密な考察は、特に短編に有効な読解法かと思われる。性の規範とそれに対する価値観の対比という、一見すると読みの結果はどれも類似しているように思われるが、それはあくまで根本的な軸としての結果であり、それぞれの性の表象を紐解いていく作業は、個々の作品の価値を立証することになるだろう。そして、本来は「個人」によって異なるはずである複数のジェンダーの価値観を、単一的なものに還元して性の秩序を保とうとするジェンダー・イデオロギー(という幻想)に登場人物個々人がどのように折り合いをつけるのを見ていくことは、フォースター研究にも、文学研究のジェンダー批評一般にも、さらには、ジェンダー研究一般にとっても意義ある作業となろう。

本論の特色としては、これまで多くの研究対象となってきた長編を扱う章よりも短編を扱う章が多いことである。フォースターの研究書に特徴的な短編を概略的に論じるという方法ではなく、一章につき一編ずつの作品論としていくスタイルを取る。このようなスタイルは、ここ十年ほどで学会誌を中心に徐々に増えつつあるものの、その数は十分とは言えず、今後さらに発展していく必要があるだろう。本論で扱う六編に新たな解釈が提示できれば良いと思う。

第1章では、20世紀初頭に新たな文学ジャンルとして勃興した短編に特徴的な技巧の一つである「エピファニー」が、伝記的側面の多い短編「アンセル」(“Ansell”)において著者と同じ名前主人公エドワードのジェンダー観の変容にどのような効果をもたらしているのかを論じる。エピファニーは、短編の技術的な特徴としてジェームズ・ジョイス (James Joyce) が確立した技法の一つであり、キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield) からモダニズム作家の短編において多く用いられている。しかしながら、実際にはフォースターは彼らに先んじてエピファニーを多用していた。フォースターのエピファニーの特徴は、その啓示的瞬間を機に、男性登場人物が別の男性登場人物との親密な関係性を築くことによって、規範的価値観/規範的ジェンダー観の放擲と好ましき自己像の確立を達成させることにある。本章では、エドワードと彼にそのような機会をもたらした

アンセルのジェンダーの表象を読み解きながら、エピソードの意義を検証している。

第2章では、第1章で論じる拮抗する異なる価値観の男性性という構図を軸に、「あるパニックの話」(“The Story of a Panic”)を語り手と語り手の男性性という観点から論じる。この短編は、フォースターが嫌悪するパブリック・スクール精神や実利主義という規範的男性性を誇示する人物を語り手としているという点で、フォースターの他のフィクションとは一線を画している。この語り手タイトラーは、フォースターの倫理観とは異なる人物であり、語り手として物語世界を支配するだけでなく、実際に登場人物としても支配的立場にいる。なぜあえてこのような語り手をフォースターが採用したのかを疑問点・出発点とし、「あるパニックの話」の語りによって、首尾一貫する価値観を念頭に置くイギリス中産階級出身男性の規範を体現する語り手が、首尾一貫性の欠如する語りを展開させることで、彼の拠り所とする価値観とそれに付随する男性性への不信用性を露呈させながら、規範的男性性の内包する矛盾を露呈するというフォースターの規範的男性性への語り上の姿勢を考察している。フォースターは、タイトラーの階級意識や異民族蔑視を語り上で批判しつつ、語り手としてのタイトラーの男性性に曖昧性を付与することで、規範的男性性をまったくの批判の対象とすることを回避し、ある意味では救いと共存の余地を与えていると考えられる。

第3章では、主人公ハロルドと友人トミーの間に同性愛の表象が半明示的であるために、批評史一般では軽視されがちな「エンペドクレス館」(“Albergo Empedocle”)を取り上げる。この短編のジェンダーの表象を辿りながら、「同性愛」の物語として解釈する場合にテキストのどの部分はその根拠となるのかを探る。それは従来のこの短編の同性愛的読解の問題点を挙げる作業ともなると同時に、セクシュアリティを同定することの不可能性という、読みの多層性を提示するようなテキストの可能性を探ることを目的としている。同性愛的欲望の担い手が語り手であるトミーと考えられること、そして、ハロルドのジェンダーおよびセクシュアリティの表象に断続的に見られる同性愛的欲望を断定してしまうことで生じる矛盾点を挙げながら、この短編をセクシュアリティを同定しない「クィア」なものであると論じている。

第4章では、フォースターの作品では唯一のサイエンス・フィクションである「機械が止まる」(“The Machine Stops”)を取り上げ、物語世界における過去の人間性とジェンダー(男性性)を取り戻そうと努める主人公の試みを、現実世界のジェンダー規範の切り崩しに向けた試

みとして論じる。そこには産業化・都市化によって緑が失われつつあるイングランドに対するフォースターの過去への憧憬と未来への社会改善の期待が反映されていることは言うまでもない。ここでは、フォースターの性についての作品解釈に多いセクシュアリティを視点とする読解法には依拠せず、ジェンダーを讀みの視点としている。

第5章は「要点」(“The Point of It”)と題する難解な短編の〈要点〉とは何なのかということテーマに、サブプロットを炙り出していくことで一つの解釈を試みる。一人の男の現世と来世を描くこのファンタジーの明示されない意味を性の観点から明らかにする。要点を悟ることで若くして亡くなったハロルドと、要点が分からずに生温い人生を終えるミッキー。死後の世界でハロルドと再会することによってミッキーは要点をようやく理解することになるが、冒頭のシーンにおける二人の親密な関係と、結末での二人の再会から、その要点には同性愛的意味があることが語り上の言葉から明らかであることを立証している。

第6章は「あのとときの船」(“The Other Boat”)の主人公ライオネルの死が意味することをジェンダーの視点で考察する。その意味を探るためには、巧妙に人物造形や人間関係に織り込まれる表象としてのジェンダーを辿りながら、英国人主人公の分裂したアイデンティティの問題を考察する必要があるだろう。異人種との同性愛行為の果ての自死は、たしかに悲観的なものではあるのかもしれないが、現世との決別という意味でフォースターのフィクションでは死が肯定的な意味で用いられているという特徴の顕著な例である。

第7章では、初期の長編『天使が踏むのを恐れるところ』(Where Angels Fear to Tread)と『眺めのいい部屋』(A Room with a View)に、同じく地中海地方を舞台とする短編を加え、最初期の「イタリアもの」としてまとめ、これら最初期の作品群に見られる「個人的人間関係」、つまり、個人と個人の「結びつけ」の作業をさまざまな関係性から論じる。この章はフォースターのフィクションにおける人間関係の構図を示すという意味で、本来であれば第1章としても良いものであるが、短編研究と長編研究として二部に分ける本論の構成上、中間地点に当たるこの位置に置くことにした。イギリス人と地中海地方の現地人との関係や、男同士の関係、男女の関係など、さまざまな関係性に付随する問題点を、それぞれの関係ごとに考察する。これら初期の作品群には、作家としての未熟さによるものであるのか、規範的価値観を超えることのできない関係性と、その後の作品に通じる性の曖

味が付与された関係が多く描かれていることが分かる。

第8章は『ハワーズ・エンド』(*Howards End*)においてフォースターの批判対象である帝国主義的・実利主義的男性性が完全に否定されるのではなく、そうした価値観には本来相容れない知性・理想主義といったフォースターの価値観が、それにどのように折り合いをつけ、異なる価値観と価値観とが小説のエピグラフのようにいかにして「結びつけ」られるのかを分析することを目的としている。一見単純なシュレーゲル家の「女性性」とウィルコックス家の「男性性」の対立の構図が、実際には常にジェンダー・イデオロギーを挿入する形で表象されている点を綿密に読み解きながら、小説の根幹とも言えるハワーズ・エンド邸とその他の家屋敷が複雑な「結びつけ」にどのような形で寄与しているのかを検証している。それはある意味でのこの小説の主人公とも言うべきハワーズ・エンド邸の「中性性」が、この物語の中心軸ともなっており、規範的なジェンダー観の脱構築と、階級意識の変容につながる結末へと「結びつけ」ている点も重要である。

第9章では、同性愛を真っ向から描いた作品という点で英文学史上記念碑的作品とも言える『モーリス』(*Maurice*)を取り上げる。エドワード・カーペンター(*Edward Carpenter*)の影響から「肉体性」に重きを置かれがちなのこの小説であるが、実際には書物を始めとするさまざまな「書かれた言葉」が主人公モーリスの成長物語を可能にし、階級差を超える男同士の関係を成就させる結末にしかと運んでいく過程を辿っていく。古い権威的な書物としての聖書やギリシャ古典作品に対し、宇宙進化論やチャイコフスキーの伝記、そして、労働者階級アレクからの書記言語規範を逸する手紙など、いわゆる新しいテキストが物語展開とモーリスとアレクの関係構築に如実に寄与していることが明らかである。

第10章では、フォースターの最大傑作『インドへの道』(*A Passage to India*)を取り上げる。小説中でイギリス人が求める「本物のインド」を見ることはできるのかをテーマに、イギリス人個々人の異文化「理解」の方法とインド表象とを辿りながら、異文化交流の困難について考える。インド人とイギリス人という植民地下における単純な二項対立的関係ではなく、宗教等に基づくさまざまな共同体が共存するこの物語世界では、互いの境界線を超える関係の構築が困難である点が散見される。結末におけるインド人アジズとイギリス人フィールディングの友好的関係を確立することの困難は、植民地政策における主従関係という時代的問題上、致し方ないことであ

る。それは、フォースターが同時代の問題を、包み隠さず客観的に表現した結果なのである。この章ではこれまでの批評に準拠しながらオーソドックスな読解を行っている。

以上が本論の構成である。フォースターのフィクションにおける「個人的人間関係」は、それまで異なる価値観を持っていた者同士で築かれる関係性が多い。それは、ただ単に異なる価値観を「結びつけ」というものではなく、ときには失敗の危険を孕みながらも、無事に達成されたり、また逆に失敗に終わってしまったりする。またときには、イギリス人中産階級の身勝手な行動、自己充足、自己解決などによって、異なる民族・人種・階級出身者の犠牲を伴うこともある。しかしながら、そうした失敗は、性の規範、階級意識、異民族蔑視、植民地の問題等、時代のイデオロギー上致し方ないことでもあり、それこそがフォースターが提示する「時代的問題」と言えるのではないだろうか。

現実社会の価値観変容への期待と過去の英国を取り戻したいというフォースターの願いは、同時代の社会ではなく、つねに「先に」向けられている。これもまたフォースターのフィクションに顕著である特徴の一つと言えるだろう。未来の世界に過去の人間性の回復への希望を託すクーノ、家族制度の変容を暗示させるシュレーゲル姉妹、ヘレンとレナードの子供がトムと将来築いていくであろう中産階級の境界を超える関係性、緑の森へと逃れるモーリスとアレク、友情を先延ばしにしたアジズとフィールディングなど、本論で取り上げてきた「個人」たちやその関係性だけを見てもそれは明らかである。同時代の形而下の問題系を提示しながら、現状が改善され、「個人」が「私生活」を重視できる社会をフォースターは未来に求める。それは社会的な意味だけでなく、個人的な意味でも同じであり、「個人」を縛りつける日常の「重荷」を提示し、フォースターが同情的な態度でもって描き出す登場人物たちは、それぞれがそれぞれの「重荷」に向き合う。フォースターが提示した問題系には、彼自身が嫌っていた規範的価値観、個人的に相容れない価値観も勿論含まれていることは明らかだが、それらを完全に否定しつくすのではなく、関係性のどこかに希望的狭間を残し、共存を可能にする余地を与える。つまり、違いを違いのまま残しておき、決定不能性を付与するのである。ここにフォースターのフィクションにおける「個人的人間関係」と「私生活」の重要性が、そして、「個人」に対する同情の精神と洞察力の鋭さが見られると言えるだろう。

フォースターのフィクションは、常に新たな視点で読

み解かれてきたと同時に、常に新たな視点を歓迎する。それは、各時代の思想のトレンドや知のモードに共鳴するほど多様な問題を含んでいるということも勿論だが、時代に関わらず、人間の根幹につながる問題やどの時代の規範的価値観をも揺さぶる可能性を、フォースターのテキストが（おそらく意図的に）孕んでいるゆえのこと

であろう。さまざまな関係性の中でフォースターの作品の中の「個人」たちは、読者に共感を求め、無意識にも反感を買うこともありながらも、人間の規範に対する盲従的態度や規範を押しつける体制側についての問題をつねに提起し続けるのである。